

『明るい未来への「たすき」』

練馬区立練馬東中学校 第三学年 白石 優奈

私は毎年、沖縄に住んでいる祖母に会いに行くのが楽しみだった。普段はあまり会えない祖母に会えることに加え、沖縄観光としても楽しめたからだ。サンゴ礁のきれいな海やジンベイザメを見ることができ、美ら海水族館など沖縄には様々な観光名所がある。そして毎年帰省をする内に、私にとってそれらがとても魅力的で楽しいものになった。もちろん首里城もそれらの一つだった。私が初めて首里城に行ったのは6歳のときである。その圧倒的な存在感に魅了され、毎年のように首里城に行きたいと親に頼み込み、連れて行ってもらっていた。そんな中、五年前の二十九年の十月三十一日、私はニュースで首里城が焼失したことを知った。そのとき大きな喪失感を感じたことを今でも覚えている。そして復興のために何か協力できることはないかと思った。そこでインターネットで調べてみると、寄付金の募集やふるさと納税をしていると知った。大好きな首里城の復興のため力になれるチャンスだと思った私は、親に頼み自分のお小遣いから募金してもらった。現在は募金は終了し、あと三年で首里城が完成するそうだ。そのことを知ったときには自分の復興させたいという思いが届いたようでとても嬉しくなった。

このような経験を通して、私は税の本当の意味を知った。今までの私にとって、税とは、負担になるものや嫌々払うもの、というマイナスなイメージしかなかった。しかし本当は、自分の助けたいという思いを繋げられる「たすき」なのだと分かったのである。私達が普段払っている税についても調べてみると、病院の医療費や高齢者のための介護や年金、道路や橋の整備など私達の生活には欠かせない様々なサービスに使われているのだと分かった。つまり、私達が払っている税は結果的には私達のためになっているということだ。税はただ単に「負担」や「重荷」として捉えるべきではないと思った。

「無知は罪なり」というソクラテスの言葉がある。これは、何事も知らないことによつて無責任な行動を引き起こしてしまうということだ。税についても同じことがいえると思う。例えば、ニュースではしばしば芸能人の脱税についての報道をしている。そのような世の中になっているのも、税の納める意味や目的を知らない「無知」が原因だと思う。誰だって税を一度は払ったことがあるのだから、一人一人が税のある意味を考えていくことが大切だと思った。中学生の私も、大人になったら税に関わることが増えるだろう。そんな時に、この作文を通して考えたことを活かし、明るい未来への「たすき」を繋げていきたい。